

もくじ

拓本の鑑賞と記録…P1 文字から見る当館所蔵郷土玩具…P3  
あだち民具図典⑭縄もっこ…P4

# 足立史談

第649号

2022年3月15日  
足立区立郷土博物館内  
足立史談編集局  
〒120-0001  
東京都足立区大谷田5-20-1  
TEL 03-3620-9393  
FAX 03-5697-6562

## 拓本の鑑賞と記録

「協働 拓本展」とあだち拓本研究会へ

郷土博物館

### 1 拓本の展覧会

墨で和紙に石碑や器物の造形や文字を写しとるのが拓本です。釣り愛好家の人

たちがつくる魚拓も、その一つです。写真が無かった時代には石碑などに記された名文や、像容を写しとることが盛んに行われました。拓本の制作には様々な方法があり



妻沼聖天院（熊谷市）芭蕉句碑での拓本制作

制作された、著名な雲崗石窟（ろうんこうせつ）の図像の拓本です。署名から昭和十二（一九三七）年には美術史家の会津八一の手元



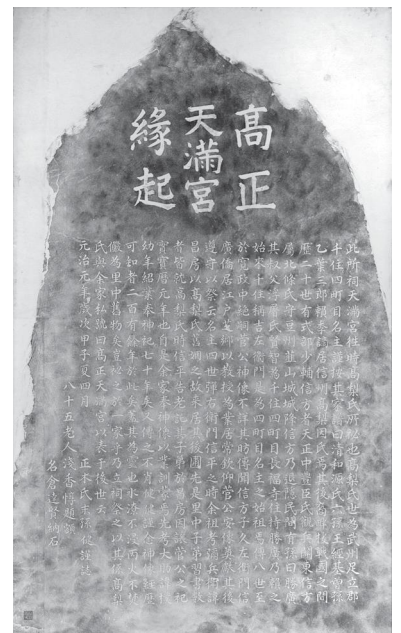
鳳凰図の拓本 雲崗石窟（中国山東省）会津八一旧蔵。

ますが、代表的なのは和紙を水に濡らし、石碑に貼り、その上から墨をあてて写す手法です。今回、あだち拓本研究会と同会の勝村秀堂氏所蔵の旧拓コレクションなど、区内で拓本研究を行っている方々から拓本を招来し、展覧会を開催します。

■旧拓コレクションから 旧拓とは主に戦前に採拓（拓本を制作すること）された作品です。著名な石碑の多くは現在、文化財保護の観点等から採拓できない場合も多いのですが、コレクションには江戸時代から戦前

期までに採拓された旧拓が伝来しています。中には現在滅失、損傷した石碑の拓本も含まれ希少資料となっています。下の「鳳凰図」は戦前に制作された、著名な雲崗石窟（ろうんこうせつ）の図像の拓本です。署名から昭和十二（一九三七）年には美術史家の会津八一の手元にあつたことがわかります。この拓本は後に門人の料治熊太（りょうじくまた）の許にあり、同家から収集されました。

■研究会の採拓 あだち拓本研究会は平成四（一九九二）年に設立された団体で郷土博物館の協働グループとして登録されています。会自身で採拓活動をしばしば行い、足立区のみならず区外にも足を延ばして拓本制作を行っています。上段の写真は埼玉県熊谷市の妻沼聖天院にある芭蕉句碑で、表は江戸の文人、大田南畝

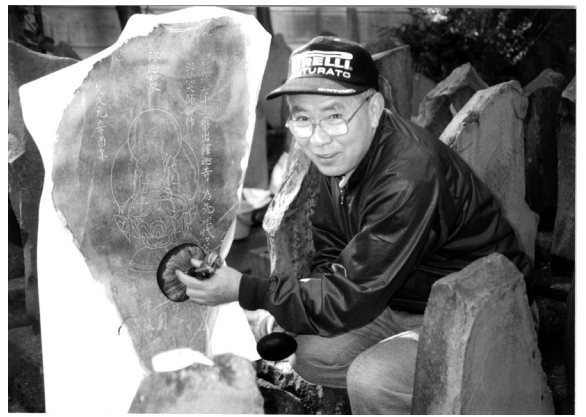


千住四丁目氷川神社所在の縁起碑



妻沼の芭蕉句碑 南畝の「稲つまや 闇のかた行 鶉鶉の声」(右)と 巢兆の建立由来 (左)。

裏面は千住の文人の建部巢兆による建立由来が記されています(後述)。前頁下段右側の拓本は千住四丁目水川神社の「高正天満宮縁起碑」です。正木家が伝来した菅公像の祀られた天満宮についての由緒を記した記念碑で、美しく採拓されています。



石碑の採拓のようす (区内寺院)

意外と思われるかもしれませんが、石碑はしばしば損傷していきまが、地震や戦災など大きな変事での倒壊だけでなく、経年の材質劣化や酸性雨などの環境変化から損壊が進む場合があります。同会が初期に採拓した石碑類の中でも、すでに劣化が進



拓本体験会でノウハウを伝える (郷土博物館)

んでしまった事例もあり、拓本自体が貴重な記録となっています。

## 2 あだち拓本研究会の活動

拓本研究会は拓本を作成するほかにも独自の展覧会の開催、冊子の発行、拓本体験会など、様々な活動を行っています。会で拓本をとる際には、複数作成して管理者の寺院や神社に奉納するなど、所有者との関係を尊重し現地での記録保存にも貢献しています。博物館で行う体験会でも講師をつとめ来館者に拓本の魅力を伝える普及活動も行っています。こうして今年十一月には会の設立から三〇年を迎えます。



展覧会の開催 (シアター1010ギャラリー)

冒頭で妻沼聖天院の芭蕉句

碑の拓本を採っている写真をご紹介します。右は碑の表面で芭蕉の句「稲つまや 闇のかた行 鶉鶉の声」を大田南畝が記しています。「鶉鶉(ごい)」は五位鶯のことで一般には「ごうせい」と音読され、本句が収録された句集『続猿蓑』でも「五位の声」と表記されますが、この碑では南畝はあえて「鶉鶉」と記しています。

面白いのは、裏面(写真左側)の千住の俳諧師・絵師であった建部巢兆の建立由来です。元も「稲つまや」の句は伊勢で詠まれましたが、巢兆は、妻沼の俳人たちが地元でこの情景を感じた瞬間があり建碑したと記し、情景を感じるからこそ風流であり喜びなのだと言っています。由来の地にこだわらず俳諧空間で遊んだ人々の豊かさを読み取れます。妻沼の俳人たちは巢兆とも交流していた人々でした。

郷土博物館では旧拓コレクションとあだち拓本研究会の調査・制作成果を紹介する展覧会を開催します。ぜひ拓本の世界をお楽しみください。

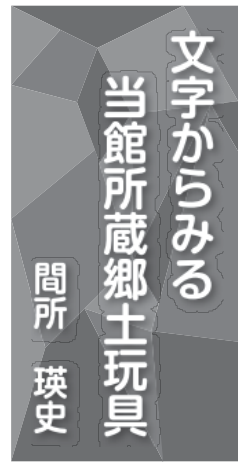
### 郷土博物館 協働 拓本展

会期 三月二三日(水)～六月五日(日)。

会場 郷土博物館企画展示室。

※会期中、展示資料の入れ替えがあります。

※新型コロナウイルス感染症拡大の状況により、会期が変更となる場合があります。



■郷土玩具について 現在、当館に収蔵されている郷土玩具資料の中には、前身である図書館の郷土資料室時代から引き継いでいて、詳しい来歴が不明の資料もあります。

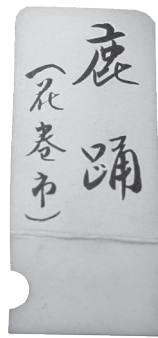
郷土玩具とは地域に伝わり、信仰や遊戯のために使用された玩具です。当館の所蔵する郷土玩具には生活の中で人々が作成・使用してきたものだけでなく、近代以降に創作されたものも存在しています。中には意匠登録(申請中)と書かれた説明書が付属している資料もあります。箱の印刷や説明書の文字が新字体であることから、ほとんどが戦後に製作されたものです。

そもそも郷土玩具は明治時代の趣味人による収集によってその価値が発見されたもので、昭和初期になると国内旅行ブームにおける土産物生産の中で創生玩具が作られて発展していききました(加藤幸治『郷土玩具の新解釈―無意識の郷愁はなぜ生まれたか』社会評論社、二〇一一)。そのため郷土玩具には地域を代表する歴史や民俗を題材にしたものもありますが、実際の生活に即していな

いものもあります。

収集された郷土玩具資料からは寄贈当時の状況や旧蔵者の情報を直接的に知ることはできません。しかし、旧蔵者がどのように郷土玩具を使用・鑑賞していたのかを推察することができます。

いまいちど、当館の所蔵する郷土玩具資料を整理すると、旧蔵者が同一であると思われる資料群の存在が見えてきます。



名札 (鹿踊)



はなまきししおどり  
花巻鹿踊

16.9cm × 11.3cm × 4.2cm

共通点は箱書きと名札です。郷土玩具資料には箱が残っているものもあり、その中には箱の蓋や側面に「甲府」「姫路」「福岡」などとサインペンなどで記されているものや名札が一緒に入っているものもあります。ここでは一例として花巻鹿踊と弓張鈴を紹介いたします。

■花巻鹿踊の名札 花巻鹿踊は、宮城・岩手県で行われる民俗芸能の鹿踊り(ししおどり)をかたどった郷土玩具です。箱の蓋の裏には「小岩図書館才野さん寄贈」と墨書しており、旧蔵者が購入したものではないことがわかります。ただし、箱の中には「鹿踊(花巻市)」と書かれた札があります。名札の裏には「庄」司節子「技家の統」という文字の断片が残っており、一九六三年に出版された書籍のタイトルであると考えられました。出版年から、旧蔵者が花巻鹿踊を入手した時期もこの前後だと推察できます。

名札は書籍のメモ書きやカセットテープの曲名カードを再利用したものが存在し、一部には変色し接着能力の失われたセロハンテープが付いているものも残っています。名札の折り目やテープか

ら、旧蔵者が郷土玩具を自宅に飾り賞玩、あるいは整理をするために名札を自作していたことがわかります。

■弓張鈴の箱書き 弓張鈴(ゆみはりすず)は山梨県の郷土玩具です。付属する説明書によると幼い頃の武田信玄が長禅寺(甲府市愛宕町二〇八)に学び弓を自作したという逸話と同寺に集められていた達磨をモデルとした土鈴を組み合わせた郷土玩具です。全国観光土産品展・山梨県観光土産品展推奨を受賞と説明書に書かれていることから、弓張鈴が観光を意識し、郷土の偉人と寺社の名産品を組み合わせて作られたものであることがわかります。

弓張鈴の箱にはサインペンで「甲府」と記されています。この文字か



弓張鈴の箱に書かれた「甲府」の文字

らは、旧蔵者あるいはその家族が甲府へ旅行した際に購入したということと、土産品をどこで購入したかを記録していたことが窺えます。

■**想起の媒体としての文字** 郷土玩具に付された名札や箱書きなどの視覚的な文字情報からはかつての旧蔵者がたくさんの郷土玩具を賞玩する際に、一つ一つの旅行の記憶を想起させる媒体となる存在であっただろうことを示しています。



弓張鈴  
24.5cm × 9.8cm

旧蔵者は郷土玩具を棚などに置いて鑑賞したり箱から出して整理する際に文字情報から旅行先の思いを馳せたりしていたのでしよう。

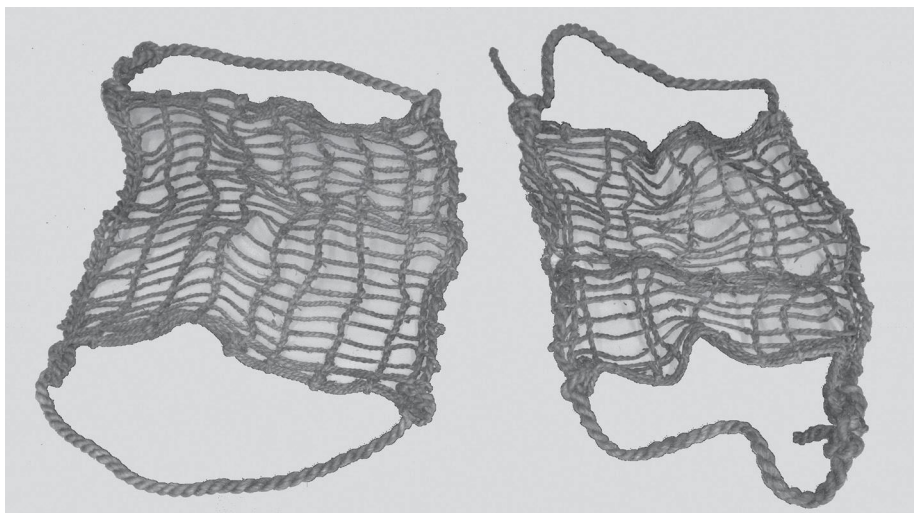
更に郷土玩具がまとまっていることから、旧蔵者は旅先で意識的に郷土玩具を購入し収集していたようです。旅先で郷土玩具を購入するのでなく、郷土玩具を集めること自体が旅の目的の一つになることもあり(野村典彦『鉄道と旅する身体』近代 民謡・伝説からデイスカバー・ジャパンへ』青弓社、二〇一一)、これらの郷土玩具もそうした趣味の中で集められたものかもしれません。

郷土玩具資料に残されたわずかな文字情報は、戦後の旅行や土産物収集のあり方だけでなく、郷土玩具が購入されてから、旧蔵者の実生活の中でどのように鑑賞されていたのかということを示唆してくれます。

(当館専門員)



■**もっこ(畚)** もっことは、縄を四角に編んだものや、むしろの四隅に綱をつけて土や石などを乗せて担い運ぶ道具です。



縄もっこ 70 cm × 70 cm 興野 内田氏寄贈

写真の縄もっこは、二つで対になり、天秤棒を使用して一人で運ぶものです。ネット状になっている網の部分に、かたまりとなった土を乗せて運びました。

もっこにはもっと重いものも乗せることもあり、二人でひとつのもっこを吊り下げて運ぶものもあります。

■**もっこの利点** 藁縄は軽く、ネットになることで不定形なものをほとんどよく包みこむことができ、適度な強度もあり、ザルや籠を使うより利便な点がありました。

藁もっこは、藁加工品であり、激しく使用される消耗品で、経年劣化も進むものなので、まず現在まで残っていることにはないという点では貴重なものなのです。

■**もっこの現在** 藁もっこは素材を変えて、現在では、ワイヤーで作られたワイヤームもっこが活躍しています。大きさも一メートルを越えた大型なものを作られ、工事現場などで、クレーン車を使って、数tの重さのある石や鉄くずを釣り上げて運ぶのにも使われているのです。昔の道具でも、その利点が生かされ現代に活躍している例です。

(当館学芸員 萩原ちとせ)